

# 旧約聖書偽典『ヨブの遺訓』スラヴ語版 —写本における言語変異について—

三谷 恵子

## はじめに<sup>1</sup>

スラヴ世界、とくに東方正教会スラヴ圏の文語伝統は、古教会スラヴ語から発し、個別の地域の文化的発展とともにローカルなりセンションへと継承発展していった。当然これらの古スラヴ文語には、文献が作られた地域の言語特徴、通時的に言えば言語変化が反映されていくことになるが、その反映の程度は、文献の作られた時代や場所だけでなく、文体やテキスト受容のあり方によっても異なっていたと考えられる。本稿では旧約聖書偽典『ヨブの遺訓』のスラヴ写本を例に、中世スラヴ文献における言語変異の現れ方とそれを生み出す要因について考察する。

## 1. テキストと写本

### 1-1.

『ヨブの遺訓』(Διαθήκη Ἰώβ [Testament of Job] 以下 TJob) は、旧約聖書「ヨブ記」(Book of Job, 以下 BJob) のヨブが、臨終にさいし子供たちに自らの生涯を語り聞かせるという設定で展開する旧約聖書偽典である。現存する写本はギリシャ語とスラヴ語のみで、ほかにコプト語の断片がある。ギリシャ語版は、土岐健治の訳と解説で本邦にも紹介されている。<sup>2</sup> TJob と旧約・新約聖書との関係や文学的また思想的価値については、紙面の都合上全面的にそちらに譲ることとし、ここでは土岐以後明らかになっ

<sup>1</sup> 本研究は JSPS 科研費 19K00544 の助成を受けたものである。また本稿は 2019 年 9 月 2-7 日にブカレストで開催された第 12 回南東ヨーロッパ研究国際学会 (International Congress of South-East European Studies) での口頭発表 Mitani Keiko, “The Slavonic version of *the Testament of Job*” を再検討し論文に書き改めたものである。

<sup>2</sup> 土岐健治「ヨブの遺訓」『聖書外典偽典』(土岐健治, 小林稔, 関根清三, 小河陽訳) 別巻補遺 I, 教文館, 1979 年, 363-420, 619-655 頁。土岐の訳は基本的に S. ブロックに依拠している: Sebastian P. Brock, *Testamentum Iobi. Pseudepigrapha Veteris Testamenti Graeca 2* (Leiden: Brill, 1967).

たことを含め、簡単にテキストについて記述する。

TJob の発生に関しては、これが BJob から発したことは確かとしても、いつどこで、また何の、あるいは誰のために作られたかについては、今も議論が続いている。最古のエヴィデンスはパピルスに書かれた 4 世紀頃のコプト語テキストだが、これらは断片で、ここから原初の物語を再構成することはできない。<sup>3</sup> BJob とは異なる世界観を提示し、独特のユーモアさえ感じさせるこの興味深いテキストは長く忘れられていたが、19 世紀に A. マイや M.R. ジェイムズにより“発見”され、以来その発生や発展について議論が展開されてきた。<sup>4</sup> これまでの研究では、発生は紀元前 1 世紀から後 1 世紀の間、ヨブがエジプト王として登場することから発祥の地はエジプト、ユダヤ教の価値観が基底をなすが、キリスト教の影響を受けて今日の姿になった、といった説が出されている。不明なことは多いが、現存する TJob の作者が LXX のヨブ記を参照したとする見方はほぼ定まっている。<sup>5</sup>

TJob は「病を得て死の迫ったヨブは、7 人の息子と 3 人の娘を周りに集め、言った」という三人称の散文体で始まり、しかしそのすぐ後から末尾近くまで、ヨブによる一人称の語りが続く。内容から大きく 3 部に分けられる語りの最初の部分では、栄華を誇ったエジプト王ヨブが、全財産と家族と健康な体を失ったいきさつが語られる。ヨブが受ける災厄は BJob のそれと並行するが、TJob では、ヨブの災いはあらかじめ神の使者－「光」－によって予告されており、あらゆる試練に耐えれば最後には栄光を得ると告げられていたヨブは、度重なる不幸にも屈しない。そんなヨブの姿に圧倒されたサタンがヨブの前から退散して、最初の部分が終わる。続く部分は、遠方からの友

<sup>3</sup> コプト語パピルスはケルン大学古文書研究所蔵。コプト断片の研究の最近の成果は Gesa Schenke and Gesine Schenke Robinson, *Der koptische Kölner Papyruskodex 3221, Teil I: Das Testament des Iob*. Papyrologica Coloniensia, vol. 33 (Paderborn: Ferdinand Schöningh, 2008) にまとめられている。コプト断片の発見や研究史の概要は Maria Haralambakis, *The Testament of Job. Text, Narrative and Reception History* (London, New Delhi, New York, Sydney: Bloomsbury, 2012), p. 4, pp. 34-38.

<sup>4</sup> Montague R. James, “The Testament of Job,” in Armitage Robinson, ed., *Apocrypha Anecdota II. Texts and Studies V* (Cambridge: Cambridge University Press, 1897), lxxii-cii, pp. 104-137; Russell Spittler, “The Testament of Job,” in James Charlesworth, ed., *The Old Testament Pseudepigrapha*, vol. 1. (New York: Doubleday, 1983), pp. 829-869; Raymond Thornhill, “The Testament of Job,” in Hedley Sparks, ed., *The Apocryphal Old Testament* (Oxford: Clarendon, 1984), pp. 617-668; Michael A. Knibb and Pieter W. van der Horst, eds., *Studies on the Testament of Job* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989) など。研究史は Russell Spittler, “The Testament of Job: A history of research and interpretation,” in Knibb and Horst, *Studies on the Testament of Job*, pp. 7-32. その他近年までの TJob についての研究概要は Haralambakis, *The Testament of Job*, pp. 5-24.

<sup>5</sup> Spittler, “The Testament of Job,” pp. 830-831; Thornhill, “The Testament of Job,” p. 618; 土岐健治「ヨブの遺訓」366-367 頁。

人達とヨブとのやり取りからなる。BJob で「teman人エリパズ、シユア人ビルダデ、ナーマ人ゾパル」<sup>6</sup> がヨブのもとを訪れるように、TJob でもこれらの王たちがヨブを慰めるために登場する。しかし彼らの態度はといえば、様変わりした友の姿にこれは本当にヨブなのかと問うたり、ヨブの正気を疑ったりと、検分役のようでさえある。ここにヨブの妻の死のエピソードが挿入され、その後、もう一人の訪問者エリフがサタンにそそのかされてヨブを侮辱する。そこについて神が現れてヨブを賞賛し、第2の部分が終わる。ヨブの話の最後は、富と地位を取り戻したヨブが臨終を迎える場面となる。息子たちに財産分与をしたあと、私たちには何も残されないのですかと言う娘たちに、ヨブは、これを身につけて健全な体を取り戻したという不思議な力をもつ紐を与える。この紐のくだりについては解釈がさまざまにあるが、ともかく、紐を身につけた娘たちが「天使のことばで」神への賛辞を歌うというグロソリア的現象が起こり、<sup>7</sup> ヨブの語りは終わる。物語の末尾にヨブの兄弟ネレウスが現れ、ヨブの死を偲んで話を結ぶ。

## 1-2.

TJob を伝える写本はギリシャ語に4点、スラヴ世界に9点、スラヴ写本はいずれも古セルビア語で書かれている。<sup>8</sup>

ギリシャ語版は1833年、A. マイによりローマ・ヴァチカン図書館 Gr 1238, f. 340v-349v (1195年~13世紀) が刊行されて近代世界に紹介された。<sup>9</sup> その後、M.R. ジェイムズがパリ・フランス国立図書館 Fonds grec 2658, f.72-92 (11世紀) を刊行。<sup>10</sup> 他にパリ・フランス国立図書館 Fonds, grec 938, f.172v-192v. (16世紀)、およびシチリア・メッシーナ、サンサルヴァトーレ修道院写本 29, folia 35v-41v (1307年)<sup>11</sup> がある。パリ 938 はジェイムズによれば上記 2668 (P と略) のコピーである。現在では P, ヴァチカン写

<sup>6</sup> 表記は関根正雄『ヨブ記』岩波文庫, 1971年による。

<sup>7</sup> この部分のグロソリアという解釈は Pieter W. der Horst and Michael A. Knibb, "Introduction," in Knibb and Horst, *Studies on the Testament of Job*, p. 1.

<sup>8</sup> ほかに S. ブロックは、アラビア語で残されている『受難者ヨブの物語』に、テキスト上の直接の繋がりはないものの、ヨブの妻の髪についてのエピソードなど TJob と共通する要素があることを指摘している: Brock, *Testamentum Iobi*, p. 3; George Graf, *Geschichte der Christlichen Arabischen Literatur, I* (Città del Vaticano, Bibl. Apost. Vaticana, 1944), pp. 206-207.

<sup>9</sup> Angelo Mai, *Scriptorium Veterum Nova Collection a Vaticanis Codicibus Edita*, 7 (Rome: Typis Vaticanis, 1833), pp. 180-191.

<sup>10</sup> James, "The Testament of Job".

<sup>11</sup> Augusto Mancini, "Per la Critica del Testament Iob," *Rendiconti dell' Accademia reale dei Lincei*, V, 20, 1911, pp. 479-502.

本 (V), サンサルヴァトーレ写本 (S) およびブロック, クラフトのエディションが読めるオンラインサイトもある。<sup>12</sup>

スラヴ世界の TJob については, 以下の写本が報告されている。

1. モスクワ, レーニン図書館セヴァスチヤノフコレクション, 2-43, ff. 97v-111, 15 世紀。

2. ベオグラード, セルビア国立図書館 No. 506 (焼失)。

3. プラハ, チェコ国立博物館図書館 IX H 2.1 シャファーリクコレクション), ff. 158r-177v; 188r/v,<sup>13</sup> 16 世紀。

4. ペテルブルク, ロシア学術アカデミー13.4.10, スィルクコレクション, ff. 122r-151v, 16 世紀。

5. ベオグラード, セルビア国立図書館 149, 51v-71v (焼失)。<sup>14</sup>

6. ツェティニエ, 主教座図書館, 17 世紀 (所在不明)。

7. ベオグラード, セルビア主教座図書館 No. 219, ff. 267-318, 1381 年。<sup>15</sup>

8. ベオグラード, セルビア正教会博物館, 219, ff. 53v-68r, 1550 年頃。<sup>16</sup>

9. ソフィア, ブルガリア学術アカデミー, 86, ff. 47v-51v(+1), 17-18 世紀。<sup>17</sup>

上記のうち 1-6 はヤツィミールスキーが記述しているが,<sup>18</sup> この中で 2 と 5 は 1941 年のベオグラード空爆で焼失, 6 は現在所在不明である。2, 6 を除くスラヴ写本は M. ハラランバキスがコーデクスの特徴とともに記述している。<sup>19</sup>

TJob が含まれているコーデクスは, いずれも ロシア語で Четви とよばれるタイプ 講読用テキスト, すなわちビザンツ教父の説法や終末論的物語, 聖人伝, 偽典の類, 年代記断片, あるいは聖書抜粋などによって構成されている。

ギリシャ語のエヴィデンスの少なさを考えれば, TJob のアーキタイプ研究においてスラヴ写本の重要性が認められそうなものだが, スラヴ語版は, 古文献学者たちからは最低限の副次的資料としか見なされてこなかった。というのも, ギリシャ語写本と

<sup>12</sup> Brock, *Testamentum Iob*, pp. 3-59; Robert A. Kraft et al., *The Testament of Job according to the SV Text* (Missoula: Scholars' Press, 1974); <http://pseudepigrapha.org/docs/intro/TJob> (2019 年 7 月 30 日閲覧)。

<sup>13</sup> Jiří Polívka, "Opisi i izvodi iz nekoliko jugoslavenskih rukopisa u Pragu," *Starine*, 24, 1891, pp. 135-155.

<sup>14</sup> Stojan Novaković. "Apokrifna priča o Jovu," *Starine*, 10, 1878, pp. 157-170.

<sup>15</sup> Haralambakis, *The Testament of Job*, pp. 46-49:

<sup>16</sup> *Ibid.* pp. 53-55

<sup>17</sup> *Ibid.* pp. 60-63.

<sup>18</sup> Яцимирский А. И. Библиографический обзор апокрифовъ въ южнославянской и русской посьменности. Вып. I. Апокрфы ветхозавѣтныя. СПб., 1921. С. 271-273.

<sup>19</sup> Haralambakis, *The Testament of Job*, pp. 43-63.

比較するとスラヴ写本には誤訳や書き換え、削除などが多々ありアパラトゥスに含めるには適さず、ブロックによれば V がスラヴ語版に近いものの、これは書き換えなどを経た結果両者がたまたま似たような形になったためだという。<sup>20</sup> スラヴ文献研究においても、このテキストは近年までほとんど手つかずの状態だった。ポリーフカ以後では、上記のヤツィミールスキー、またシャラーが写本に言及している以外は、T. ヨヴァノヴィチが現代セルビア語に翻訳している程度である。<sup>21</sup> 従って、現在参照しうる写本すべてを扱ったハラランバキスが最初のまとまった研究と言える。しかしハラランバスキでは写本の言語分析は行なわれていない。そこで以下では、写本の言語特徴からこのテキストにアプローチしたい。

## 2. 写本の言語特徴

本稿では、シャファーリク写本 (Š) セヴァスチヤノフ写本 (M)、ノヴァコヴィチが刊行したベオグラード写本 (N) の 3 点を対象とする。Š, N はポリーフカとノヴァコヴィチの刊本、M は原本を用い、前 2 者はページで、M はフォリオで引用箇所を示す。Š は完全な写本で、誤訳や削除があるとはいえ、TJob のストーリーをおおむね忠実に伝えている。N は途中にかなり破損があり、ノヴァコヴィチは破損部分をミーニュの現代フランス語版のセルビア語訳で補っている。<sup>22</sup> M はヨブと友人の王たちのやりとりの場面で切れているが、全体に Š に近い。ハラランバキスはスラヴ写本が系譜関係から 2 つのグループに分かれるとしており、その区分では Š, M が同じグループ、N は別グループに属する。<sup>23</sup> しかしこれらは、ハラランバキスも述べているように、もともとと同じプロトグラフに発するものであり、また本稿で後述するように分岐はそれほど古くないと考えられる。よってこれらをまとめて扱うことは、写本に現れる言語変異とその意味を考察する本稿の目的には支障とならないと考える。

<sup>20</sup> Brock, *Testamentum Iob*, pp. 7-13.

<sup>21</sup> Berndt Schaller, “Das Testament Hiobs,” in Berndt Schaller, Werner G. Kümmel, Christian Habicht, Otto Kaiser, Otto Plöger, and Josef Schreiner. *Jüdische Schriften aus hellenistisch-römischer Zeit, Das Testament Hiobs*, Band III. Unterweisung in lehrhafter Form, Lieferung 3. (Gütetsloh: Gütetsloher Verlagshaus Getd Mohn, 1979), p. 317; Томислав Јовановић. “Житије и подвизи праведног Јова.” *Апокрифи. Старозаветни према српским преписима*. Библиотека Стара српска књижевност у 24 књиге. књ. 23, Т. I. Београд, 2005. С. 167-194.

<sup>22</sup> Jacques P. Migne, *Dictionnaire des Apocryphes*, vol. 2 (Paris: Barrière, 1858), pp. 401-420.

<sup>23</sup> Haralambakis, *The Testament of Job*, p. 63.

2-1.

いずれの写本にも、プロトグラフの古さを示す特徴が残されている。音韻面では \*tj, \*dj のブルガリア反映形: \*tj>št: ноци, свѣща, \*dj>žd: виждь, даждь (10x),<sup>24</sup> тождь, исподерждь (Š 152), вижду (N 164); zr > zdr: то слышавь и въздрадувахъ се (Š 139) も見られる。<sup>25</sup>

形態特徴では、人称代名詞複数一人称、二人称与格接語形 ни, ви:<sup>26</sup> даждь ни злато (Š 139) 「私たちに金を下さい」; јако да вдаст ви се грѣхъ (Š 150) 「あなたたちの罪が許されるように」; 古いシグマティクアオリスト: и ти ли еси църь иввавъ и рѣхъ азъ емь (M 109v; Š 146) 「それであなたが王ヨバブなのですか (と云い) 私はそうだと云った」, отвѣщавше рече (Š 140) 「彼らは答えて云った」; 母音短縮のない未完了過去形: ты ли еси иже имешаше златѣе вдровъ (Š 146) 「あなたがあの黄金の寝台を持っていた人なのか」; 双数形の使用: сыгрѣшишь еси тыи и в. друга твоа еже глаголаста лъжу (Š 150) 「汝は過ちをおかした, そしてまた嘘をついた二人の友も」。この部分はギリシャ語でも *καὶ οἱ δύο σου φίλοι; οὐ γὰρ λελαλήκατε ἀληθῶς* と「二人の友」が現れており、スラヴ語版がこれに対応するものであることは明らかである。ここから, TJob のスラヴ語訳は双数がまだアクティヴなカテゴリーであった時代に作られたと推測される。双数形は даждь ми хлѣвъ вт рукы творею 「あなたが手ずからパンを与えてほしい」; с двѣма царема (Š 148) 「二人の王とともに」などにも見られる。また独立与格構文の出現: спешгоу ми въ ношты (Š 137; N 159) 「私が眠っていると」; многу врѣмену мынувшу (Š 141) 「長い時が過ぎ」もプログラフに由来する特徴として挙げられるだろう。

語彙では, иже 系の関係代名詞: еда ест богъ иже сътвори небо и землю и море и вса јаже въ ных (Š 136) 「天と地と海とそれらの中にいるすべてのものを造られたのは神なのか」; 接続詞 аще, егда, еда, јако, јако да など。また「ただ」を意味する副詞に тъкмо だけでなく тъкыно も用いられていることは, プレスラフ派の影響を推測させる。

<sup>24</sup> даждь には *область* (ἐξουσία 'power') を補語にした даждь ми область 「許可してほしい」 (Š 137: 'δός μοι ἐξουσίαν [grant me authority]) という用例がある。この句は OCS でも知られている: Josef Kurz (ed.) *Slovník jazyka staroslověnského: Lexicon linguae palaeoslovenicae*, II (Praha: Nakl. Československé akademie věd, 1973), p. 472.

<sup>25</sup> zr > zdr が古い音韻特徴であることは יִסְרָאֵל 「イスラエル」が OCS で издраниль になることなどから示唆される: Meïe A. *Общеславянский язык*. М., 2001 [A. Meillet, *Le slave commun*, 1934]. С. 110. ただしここで語幹が -радува- と u を含む形になっているのはより後の時代の影響かもしれない。

<sup>26</sup> Meïe, *Общеславянский язык*. С. 366. なお ни, ми 形はブルガリア-マケドニア語, 古セルビア語にも継承されている: Стефан Младенов. *История на българския език*. София, 1979. С. 265; Кирил Мирчев. *Историческа граматика на българския език*. София, 1958. С. 165; Александар Белић. *Историја српског језика. Фонетика. Речи са деklinацијом. Речи са конјугацијом*. Избрана дела Александра Белића. Нови Сад, 1999. С. 218-219.

このほか、古い特徴に分類されるものではないが、スラヴ版 TJob のみならずスラヴ版 BJob の形成と発展に関わると推測される興味深い要素について指摘しておこう。Š は、ギリシャ語版 V, S と同じように、話の末尾に BJob の最後の部分を取り込んでいる: *жизнь же ѿвѣъ . . . всего живота своего .сми. лѣтъ видѣъ сыновѣъ и вѣнчаны и прѣвѣдѣнѣи до .г. го поѣса* (Š 153-154) 「ヨブは. . . 248 年の人生を生き、息子と孫と曾孫の 3 世代までを見た」(V: *ἕως τετάρτης γενεᾶς*; S *τετάρτην γενεάν* 「4 世まで」)。<sup>27</sup> そしてこの *до .г. го поѣса* という箇所は、いくつかのやや込み入った理由から注目に値すると言える。<sup>28</sup> まず、この部分は、V や S にあるように本来「4 世代」なのだが、Š では .г. 「3」となっている。ここからたとえばブロックは、スラヴ写本が最初グラゴル文字で書かれた可能性を指摘するのである。<sup>29</sup> この指摘が正しいとすると TJob のスラヴ訳の出現はおそらく、11 世紀以前となるだろう。けれどこれと共起している *поѣсъ* について見ると、これを「世代」(*γενεά*) の意味で用いる例は OCS コーパスにはない。<sup>30</sup> 南スラヴ世界で現存する最古の BJob は 12 世紀のパリメイニクに含まれるものだが、これらで対応する箇所の「世代」は *родъ/родь* である: レーニン図書館グリゴーロヴィチ・コレクション (Ф. 87, No. 2, ブルガリア) *видѣвъ сѣны сѣновъ своихъ дѣтии родъ* (f.77v); ペテルブルク・ロシア国立図書館 (Q.п.I.51, セルビア) *видѣъ ѿвѣъ сѣны свое и сѣны сѣновъ своихъ четвъртыи родъ* (f.49v)。そして *поѣсъ* が「世代」の意味で BJob に現れるのは、管見の及ぶ限り、14 世紀後半に作られたブルガリア聖書 (ペテルブルク・ロシア国立図書館 F.I.461., XIV c.) が最初である: *видѣъ ѿвѣъ свои сѣны и сѣны сѣновъ свой дѣтии поѣсъ* 「ヨブは息子と息子の息子の 4 世代を見た」。<sup>31</sup> 比較するとわかるように、ブルガリア聖書のこの部分は Š の最後とかなり似ており、両者の間には直接的な引用関係が推察される。だがこの場合、TJob のスラヴ語訳がグラゴル文字の時代に作られたという可能性はほぼ否定される。では Š の .г. は

<sup>27</sup> cf. LXX. Job 42:16 “καὶ εἶδεν Ἰωβ τοὺς υἱοὺς αὐτοῦ καὶ τοὺς υἱοὺς τῶν υἰῶν αὐτοῦ τετάρτην γενεάν” Alfred Rahlfs, Robert, Hanhart, *Septuaginta: Vetus Testamentum Graecum*. (Göttingen: Vandenhoeck et Ruprecht, 2006), Vol. II. p. 344.ただし BJob ではヨブの生きた年は 140 年となっている。

<sup>28</sup> LXX と共通するこの末尾はギリシャ語写本では S, V に見られるが P には含まれていない。スラヴ写本でも N にこの部分はない。

<sup>29</sup> Brock, *Testamentum Iobi*, p. 13.

<sup>30</sup> 以下の辞書を参照したが、「世代」の意味の記載はない: *Slovník jazyka staroslověnského*, II; Иванова-Мирчева, Дора (от ред) *Старобългарски речник*. Т. II. София, 2009.

<sup>31</sup> ミクロシチやスレズネフスキーは「世代」の意味を挙げているが、用例は 1499 年の『ロシア聖書』(『ゲンナジイ聖書』)の「ヨブ記」のみである: *видѣвъ ѿвѣъ сѣны свои и сѣны сѣновъ свой четвъртыи поѣсъ*. Franz Miklosich, *Lexicon palaeoslovenico-graeco-latinum: emendatum auctum* (Vindobonae: G. Braumüller, 1862), p. 654; *Срезневский И. И.* Материалы для словаря древне-русского языка по письменным памятникам. Т. 2. СПб., 1902. С. 1340.

単なる誤記なのか、またここに現れる *попась* の用法の起源はどこにあるのか。これ以上の議論は本稿の範囲を超えるため立ち入らないが、おそらくこの箇所はスラヴ世界における BJob の翻訳と伝播の歴史にも関わる点であり、今後さらに検討していくべき課題と位置付けられる。<sup>32</sup>

さて、上記から検証できる範囲で推察できるのは、以下のことだろう。まず全般的な特徴から見て、翻訳の発生はブルガリア、*ТЬЧИНЮ* や *ВРАЧЕВ* などの使用からは写本の伝統形成にプレスラフ派の影響があったことが示唆される。TJob がクロアチア・グラゴル派に伝わっていない（少なくとも証拠はない）ことから、プロトグラフの出現を 11 世紀以前に推定するのは避けたほうが良いかもしれない。<sup>33</sup> いっぽう双数形の出現を考慮すると、プロトグラフの発生は、双数のアクティブな使用が消滅して中期ブルガリア時代（12～14 世紀）より後には下らないだろう。<sup>34</sup> 以上を合わせると、スラヴ語訳の発生はプレスラフ時代以後でかつ中期ブルガリア時代以前、すなわち 11 世紀から遅くとも 13 世紀初頭の高ブルガリア文語文化圏が想定される。

## 2-2.

このように古い言語特徴があると同時に、現存する写本には新しい言語特徴も目立つ。具体的には、まず男性名詞複数 *ов-*語尾の拡張: *ИМЕАШЕ ЗЛАТІЕ ВДРОВЪ; ЕЛИКО ВРАЧЕВЪ ИМАМО* (§ 148)がある。これはスラヴ祖語の *u* 語幹名詞複数語尾だが、中期ブルガリア語また古セルビア語で *o* 語幹の単音節名詞複数形に拡張したものである。<sup>35</sup> このような *u* 語幹複数語尾の *o* 語幹への拡張は OCS カノンには生じていない。また上述したように *ДАТИ* の命令形には *ДАЖДЪ* が使われているが、セルビア語形の *ДАИ* も § で 1 例見られる: *РЕКОХ; ДАИ КЕМУ И РЦИ* (§ 137) 「私は言った、彼に与えてこう言いなさい」。 *ДЦЕ* に代わる *АКО* , また *ИЖЕ* に代わる *КОИ* などセルビア語の世俗語要素も現れている: *АКО ХОЩЕШИ ПОМИЛОВАТ ПОМИЛОУИ АКО ЛИ ТЋИ ЈЕСИ ВЫДЕЛЬ* (§ 142) 「もし情けをくださるならお情けを、もしあなたが見たのなら...」; *НЪВЕТ ЛИ ИМЕЛА КАМИЛИ КОЕ СОУ НОСИЛИ ВСАА БЛАГАА ПО ЗЕМЛЪХ*

<sup>32</sup> セルビア語で *pas* (<*pojas*) には「世代」の意味がある。ブルガリア語でも古語、また方言でこの意味がある（ブルガリア語研究所サイト *Речник на българския език* [<http://ibl.bas.bg/rbe/lang/bg/пояс>]）。

<sup>33</sup> 11 世紀より前にブルガリアで訳されたアポクリファの類はしばしばクロアチアのグラゴル派にも伝わっている: *Рождественская М. В. Турилов А. А. Апокрифы // Православная Энциклопедия. Церковно-научный центр “Православная энциклопедия”*. Т. 3. 2009. С. 46-58. とはいえこれは単に蓋然性の問題かもしれない。

<sup>34</sup> Мирчев. *Историческа граматика*. С. 57.

<sup>35</sup> Там же. С. 146-147; Белић. *Историја српског језика*. С. 164.



и насищали нищійх (Š 143) 「彼女は、国中にあらゆる富を運び貧者に食べ物を配ったあのラクダの持ち主だった人ではないか」。この例では完了形の助動詞 3 人称複数形も *соу* と語末の *т* のない俗語形になっている。さらに、先には双数形の痕跡を指摘したが、他の場合では二人の人物が話題になっていても、複数形が使用されている。たとえば *егда вѣхомь в всакыихъ благыихъ земльниихъ* (Š 144) 「私たち (二人) がこの地上のあらゆる富に包まれていたとき」は、ヨブが自分と妻のかつての暮らしについて話している箇所、本来なら双数形が用いられるところだが、使われているのは一人称複数形である。またヨブの妻がヨブに向かって言う *мы же остамо бѣе памяти* (Š 142) 「私たちには記憶 (するもの) がなくなりました」というフレーズは、直接対応する表現がギリシャ語にはないが、<sup>36</sup> ここでも「私たち」はヨブ夫婦を意図していながら、一人称複数形で書かれている。しかもアオリストは *остамо* というセルビア語形である。

写本の中の世俗語要素は、スラヴ版 TJob の系譜分岐の時期についても示唆を与えてくれる。紙面の関係で詳細な議論はできないが、たとえば次の 2 例を比較してみよう：

Š *мы кесмо .г. царіе пришли видѣти те. елико врачевь имамо вѣхъ прїивели кесмо врачевати те* (148)

N *Мїи есмо .г. царіе пришлїи видети те и колико врачевь имамо всехъ привѣли есмо цѣлїтѣ те* (166)

どちらも「我ら 3 人の王はあなたに会いに来たのです、我らのもとにいる医者をみな引き連れてあなたを治療するために」とあり、*елико* と *колико*、また最後の「治療する」に異読が見られるが、それ以外はほぼ同じで、どちらにも *кесмо*、*имамо* という、-о で終わる一人称複数形が現れている。これはスラヴ祖語由来の 1 人称複数現在語尾-мь がセルビア語で *мо* となった歴史的变化を反映した形である。Š と N が異なる系譜に属するとすると、このセルビア語形の侵入は両者のアンティグラフが同じだった段階、言い換えれば写本系譜が分岐する前に起きたか、あるいは後に別々に起きて同じ形になったかのどちらかだろう。もちろんこの箇所のみなら後者の可能性もあろうが、他にも *Š вь прьвомь разоуме ; N вь прьвомъ разоумѣ* 「(あなたが) 正気である (か)」と、2 つの写本が一致するところがある。<sup>37</sup> ここは意味からして *правомь* 「正しい」のはずであり、*прьвомь* という綴りは、スラヴ祖語の強い位置のイェルがセルビア語では *a* に変わったことを背景とした過剰矯正 (\*ъ>a→“a>ъ”) の結果と考えられる。このような誤記がそ

<sup>36</sup> ここに対応するギリシャ語はブロックのエディションで ἀπόλετο ἀπὸ γῆς τὸ μνημόσυόν σου 「あなたの記憶は失われた」。

<sup>37</sup> ギリシャ語版の対応箇所は(S) ἡ καρδία σου οὐκ ἐξεστι 「あなたの心がたしかでない(か)」。

れぞれ別に起こる蓋然性はかなり低いだろう。以上から、2つの系譜への分岐はこれらのアンティグラフに新しいセルビア語要素が侵入し始めた後、つまり TJob がセルビアに伝わった後に起きたものと考えられる。

### 3. 過去時制に現れる言語変異

前節では TJob の写本の言語に古い要素と新しい要素が混在している状況を記述した。このことは過去時制の用法についてもあてはまる。本節ではこれ焦点をあてる。

スラヴ版 TJob で、過去の事象について語る形式は単純過去形すなわちアオリスト(AO)と未完了過去(IMP)、および迂言形である完了(PF)である。古スラヴ文献における単純過去とPFの使い分け、とくにAOとPFの違いと同義性については長い議論があるが、ごく簡単に言えば、単純過去形はある事象を発話時点との関連性なしに提示し、PFはすでに起きた事象の発話時点における結果残存<sup>38</sup>あるいは事象と発話時点の間の関与性<sup>39</sup>を表すとされてきた。『時制論』で知られるヴァインリヒの用語を援用すれば、AO/IMPは「語りの世界」(erzählte Welt)を構築する形式であるのに対し、発話時点と事象を結びつけるPFは「説明の世界」(besprochene Welt)のレジームで用いられる形式であると言える。<sup>40</sup>

TJobでも、過去の事象は基本的にAO/IMPで表される。一人称単数主語の場合、ŠでAO/IMPは133例、PFは7例で、一人称単数にPFの用例が少ないのは、OCS福音書などに見られる傾向と同様である。<sup>41</sup>三人称単数も14例のPFを除き他はAO/IMP、また複数も、PFは一人称複数に3例と三人称複数に6例のみで、それ以外はAO/IMPが使用されている。これと対照的に二人称単数は主節ではつねにPFが用いられ<sup>42</sup>単純

<sup>38</sup> *Meje A. Общеславянский язык. С. 210-212; Horace Lunt, Old Church Slavonic Grammar (Berlin, New York: Mouton de Gruyter, 2001), p. 113.*

<sup>39</sup> *Бунина И. К. История глагольных времен в болгарском языке. Времена индикатива. М., 1970. С. 118-129; Мария Деянова. История на сложните минали времена в български, сърбо-хърватски и словенски език. София, 1970. С. 129-150; Catharine MacRobert, "The Competing Use of Perfect and Aorist Tenses in Old Church Slavonic," *Slavia*, r. 82, 2013, pp. 387-407.*

<sup>40</sup> *Harald Weinrich, Tempus. Besprochene und erzählte Welt (Stuttgart: Kohlhammer, 1971);* 古スラヴ語の時制体系への適応はたとえば *Jouko Lindstedt, "On the Development of the South Slavonic Perfect," in Three papers on the perfect. EURO TYP Working Papers, Series VI, No. 5 (European Science Foundation, 1994), pp. 32-34*にある。ヴァインリヒの2つのレジームの区別を佐藤昭裕は「古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』の研究：その言語とテキストの構造」『京都大學文學部研究紀要』1991年、31号で古ロシア語の年代記の分析に適応している。

<sup>41</sup> たとえば *Codex Marianus* で一人称単数のPFはわずか2例しかないことはよく知られている。

<sup>42</sup> OCSカノンとくに福音書においては、PFと二人称単数形の相関が古くより指摘されている：*André Vaillant, Manuel du vieux slave (Paris: Institut d'étude slave, 1964), pp. 346-347.* ただし知られ

過去形は、関係節の中に現れる未完了過去が3例のみである：ТЫ ЛИ ЕСИ ИЖЕ ИМЕАШЕ ЗЛАТІЕ  
УДРОВЪ (Š 141) 「あなたがあの黄金の寝台をもっていた人なのですか」。<sup>43</sup>

以上のように、TJobにおける、人称による偏りを伴った過去時制形の用法は、OCSのそれにおおむね一致する。そしてPFの用例にも、過去に生じた事象の発話時点における関与性という伝統的解釈で問題ないケースがある。たとえば ИМАТЬ .З. ЛѢТЬ ІАКО НѢСТ  
ВЪШЬАЛЬ ВЪ ГРАДЬ (Š 145) 「(彼は) 町に入ることなく7年になります」、МЫ КЕСМО .Г. ЦАРІЕ  
ПРИШЛИ ВИДѢТИ ТЕ ЕЛИКО ВРАЧЕВЪ ИМАМО, ВСѢХЪ ПРІИВЕЛИ КЕСМО ВРАЧЕВАТИ (Š 148) 「われら3人の王  
はあなたに会いに来て、われらのもとにいる医者をもみな治療のために連れてきたので  
す」などでは、語られた事象の結果が発話時点で残っており、PFの使用は、この形式本  
来の機能に動機付けられていると考えうるものである。

しかしこれらと並び、すでに起きた事象の関与性という解釈では説明できない例も  
ある。たとえば ИМЕЛЬ КЕСМЪ .И. СЪТЪ ѠСЪ ИЖЕ МИ СОУТЪ БЛЮЛИ СТАДЪ МОИХЪ, ИМЕЛЬ КЕСМЪ .С. ѠСЪ ИЖЕ МИ  
СОУТЪ БЛЮЛИ ДОМЪ (P 138) 「私には8千匹の犬がおり私の家畜の番をしていたし、私にはま  
た2百匹の犬がおり私の家を守っていた」；ИМАЛЬ КЕСМЪ .Г. ТИДОУЩИ (sic) И .Е. СЪТЪ РАЛЬ ВОЛОВЪ  
ЧТО СОУТЪ УРАЛИ ВСЕ ТО ЗА НИЦІИХЪ . . . ИМАЛЬ ЕСМЪ .И. НОЖЬ ИМИ ЖЕ СОУТЪ РЕЗАЛИ ХЛѢБЪ НА ТРАПЕЗЕ ЗА  
НИЦІИХЪ . . . (Š 139) 「私には3千5百組の牛がおり畑を耕していたし . . . 貧しい者たちの  
ため食卓でパンを切る8本のナイフがあった」などでは、以前の様子を伝える場面で  
PFが使われているのだが、その状況は発話時点では失われており、伝統的なPFの意  
味でこの用法は解釈できない。同じように ДЗЬ ЕГО ВЪ ДОБЫГЪ ИЖЕ КЕСТ ДАВАЛЬ НИЦИМЪ (Š  
140) 「彼が貧者に分け与えていた財産は私が手に入れた」<sup>44</sup> でも、関係節の中の事象  
「与えていた」は過去のある時期に起きていた事象だが、発話者のサタンがこれを語っ  
ている状況には直接関与的ではない。

このようなPFの現れ方は、この形式の機能の変化によって説明されるだろう。ヴァ  
イヤンやマースロフなど過去の研究者はすでに、OCSカノンの段階でPFがAOと同義

---

ているように、スプラシル文集では三人称単数のPFが二人称単数のPFを上回っている。なお  
研究者たちは、ギリシャ語の古い完了とスラヴ語の完了は意味が異なっており、OCSテキスト  
における完了形の出現に、底本のギリシャ語の時制形式はさほど関与的でないという見解で一  
致している。トロストの研究では、OCS福音書でギリシャ語の完了がPFで訳されている割合は  
10%程度である：Klaus Trost, *Perfekt und Konditional im Altkirchenslavischen* (Wiesbaden:  
Harrassowitz, 1972).

<sup>43</sup> cf. ギリシャ語版は τοὺς χρυσοῦς κραββάτους ἔχων; スラヴ語訳では、関係節内であることから  
3人称単数のつもりだった可能性も排除できないが、同様の構文で ТЫ ЛИ ЕСИ ИЖЕ ЕСИ ПОСМѢАЛЬ  
「あなたがあの笑った人なのか」のように関係節内の動詞が関係節のヘッドに一致する例があ  
ることを考え、上記の ИМЕАШЕ も2人称単数未完了過去形と考えておく。

<sup>44</sup> ДЗЬ ЕГО ВЪ ДОБЫГЪ の部分はスラヴ語訳の意味が曖昧なので訳は Spittler に依拠した。

的に用いられていたことについて指摘しているが、<sup>45</sup> 上記の場合には、PF が不完了体動詞から作られていることに注目する必要がある。つまりここで PF は未完了過去に置き換え可能な使われ方をしているのである。J. リンドシュテトはヨーロッパ諸言語の完了形についての類型論的研究の中で、完了形が「結果相」から「参照点での関与性」を経て「経験過去」へシフトする歴史的変化について述べている。<sup>46</sup> これによれば、経験過去を表すようになった段階で、完了形は時間軸上の特定の時点に定められない不定過去について語ることのできる形式となり、完了形は過去の時制標識として用いられるようになる。ヴァイリヒの用語を用いれば、「説明の世界」の形式であった PF が「語りの世界」でも使用されるようになる。そしてじっさい、ブルガリア・マケドニア語以外のスラヴ語がたどったのはこの変化—結果を表す分詞から発した完了形が無標の過去時制形になる—というものだった。セルビア語では単純過去形が現代まで保持されたが、完了形が無標の過去形に変化するという駆流は同じだったと言える。このことをあてはめると、TJob の写本に見られる PF の用法は、セルビア語における過去時制形の歴史的変化、すなわち完了から過去に PF が移行する段階の動態を反映していることになる。<sup>47</sup> これは、PF の助動詞に *мы есмо .г. царје пришли* の *есмо* のような俗語形が現れていることとも呼応すると言えるだろう。

#### 4. 言語変異とその要因

本稿で見たとおり、TJob のスラヴ写本は、いっばうで教会スラヴ文語の伝統を保持しながらセルビアの世俗語要素の侵入を許容するという混成的な様相—一見したところ、中世文献にあった、教会文語と世俗語のダイグロシアの状況がなし崩しになったような様相を示している。このような言語的変異の発現には何が起因しているのだろうか。

スラヴ世界で「旧約聖書」がまとまった形で作られるのは 14 世紀以後だが、それ以前にも正典としての旧約聖書はさまざまな形で知られている。2-1.でもふれたように、BJob も古くはバリメイニクに含まれ、受難週のための朗読用テキストとして流布して

<sup>45</sup> Vaillant, *Manuel du vieux slav*, p. 347; Маслов Ю. Очерки по аспектологии. Л., 1984. С. 39.

<sup>46</sup> Jouko Lindstedt, “The perfect — aspectual, temporal and evidential,” in Östen Dahl, ed. *Tense and Aspect in the Languages of Europe* (Berlin, New York: Mouton de Gruyter, 2000), pp. 260-268.

<sup>47</sup> この点はデヤノヴァも記述しているが、彼女の“古セルボクロアチア語”の考察では、チャ方言文語や、中世ドゥプロヴニク文語など、完了の過去形化が早く進んだ方言の文語バリエーションの例、また外交文書や用例集から文学作品まで異なるジャンルの例などが混在しており、全体的な変化の方向性は示されているとはいえ、言語変化のプロセスの綿密な記述になっていないように見受けられる: Деянова. *История на сложните минали времена*. С. 188-203.

いた。TJob の訳者がパリメイニクの BJob を知っていたことはおそらく確かであり、このテキストが正典のヨブと関係するものであることも明らかだったに違いない。つまり受容の当初は一TJob がどういった環境でスラヴ世界に移植されたかは不明だが一これが正典そのものではないにせよ、これと近いものという意識があったことは十分想像される。そしてこのことは TJob の写本に古教会スラヴ語の基層が保持されていることに現れている。

また A. オルロフは『スラヴ世界における偽典の主要研究』の冒頭で、東方教会圏スラヴ世界における偽典受容で特異なのは、これらが正典との明確な区別なしにしばしば同じ文集に含まれて流布した点にあるとし、アブラハムやエノク、ヤコブ、モーゼなどを題材とした旧約偽典が、あたかもキリスト教の聖人のさきがけの物語であるかのように、聖人伝文集の中に組み込まれて伝えられたと述べている。<sup>48</sup> これを TJob にも適応すれば、この偽典も一種の聖人伝としてスラヴ人に認知された可能性が考えられる。実際、たとえば Š のタイトルには *маїа .s. житїє и жизнь сѣго и правѣднааго ѡуба*。「5月6日。聖なる正しき人ヨブの生涯」と、これが聖人伝であるかのような文言がつけられている。<sup>49</sup> 中世スラヴ世界において聖人伝は正典とならび高位のテキストでありここでは教会スラヴ文語の伝統が保持されていた。これもまた TJob の基層にある文語伝統に合致すると言えるだろう。

では伝播の中で、とくにセルビアに移植されたのち、教会文語に俗語要素の侵入が生じたのはどのような理由によるものだったのだろうか。

文語への世俗語要素の混入の要因としてまずは、写字生有能力あるいは写本の作られた環境の問題があったかも知れない。ただこれについて我々は何も確定的なことは言えない。また、ここで検討した写本の場合、15～16世紀と時代の下ったものであることも要因でありうるかも知れない。どのようなテキストでも、時代とともに写本の言語は必ず変化する。とはいえ、作成時期だけで写本言語の変異を説明することはできないだろう。たとえば M は、ヨブの態度に怒って帰ろうとするエリパズをビルダドが引き止める場面で切れており (f.100v) 次の f.111r からは同じ手で、『パウロの預言』が書かれている。『パウロの預言』は、キリスト教世界に広く知られた新約聖書アポクリファの一つで、東西教会圏に数多くの写本がある。<sup>50</sup> セヴァスチヤノフ・コーデク

<sup>48</sup> Andrei Orlov, *Selected Studies in the Slavonic Pseudepigrapha* (Leiden: Brill, 2009), p. 3.

<sup>49</sup> ちなみにロシア最古の文集である「ウスペンスキー文集 Успенский сборник」(12-13世紀)では5月6日のための講読テキストとして「ヨブ記」から抜粋されたテキストが入っている: *маїа маїа въ .s. днь памѣт сѣго. ѡуба. ги ба҃сви оубе*。この中身はパリメイニクのヨブと同じである。

<sup>50</sup> James K. Elliott, *The Apocryphal New Testament* (Oxford: Clarendon Press, 1993), pp. 616-645;

スの『パウロ』の言語にはしかし、TJob のような世俗語要素の混入はほとんど見られない。また過去時制はもっぱら AO/IMP で表され、PF の使用もない。これは、写本の作成時代だけが言語変異の現れる因子となるわけではないことを示すものであろう。

ではテキストの文体はどうだろうか。TJob では、ヨブの一人称で語りが進められ、その中では、ヨブとサタン、サタンとヨブの妻、ヨブと妻、ヨブと友人たちなど、登場人物間の対話が重要な部分をなす。<sup>51</sup> そしてじっさい多くの世俗要素がこうした登場人物の言葉の中に現れている。3 節で述べた PF の過去形としての使用もこれに含まれる。そもそも直接対話は、世俗語要素が入り込みやすいレジームであるとは言えるだろう。しかも TJob はテキスト自体にキリスト教的教義色が薄く、フォークロアの要素や、ある種の諧謔味さえ見え隠れする。<sup>52</sup> このような形式と内容のテキストに世俗語一文字生の日常言語が現れても不思議ではないだろう。上に述べたように、セヴァスチヤノフ・コーデクスで M の後ろにある『パウロの預言』も、パウロが語り手となって天使に話しかけ、天使がこれに答える形で進行する。しかしこちらの二人は、じっさいには周囲の世界を描写しているだけで、対話を行なっているわけではない。このアポクリフオンに世俗語要素が現れない要因には、こうした文体的特徴があると考えられる。このように、テキストの文体は言語変異の現れの程度に関与する要因であると判断される。

また、初期的誤訳が後々の言語に変異を呼び込むトリガーになった可能性も排除できないかもしれない。ブロックはスラヴ語写本にある TJob の誤訳をいくつか指摘しているが、その中にはたとえば、ヨブとサタンが対決し、ついに後者が負けを認める場面 (ジェイムズの章分けで 27.3) –ギリシャ語で ἀθλητής παλαιων μετὰ ἀθλητοῦ (V) 「相手のレスラーと格闘するレスラー」という箇所がある。<sup>53</sup> この「レスラー (格闘競技の闘士)」としてのヨブというイメージは、TJob のメッセージ形成に重要なモーメントになるはずなのだが、<sup>54</sup> スラヴ語では同じ箇所が оуѣеники вѣ старіих оуѣеникъ

---

Aurelio de Santos Otero, “XVI. Apocalypsis Pauli,” *Die handschriftliche Überlieferung der altslavischen Apokryphen*. Bd. I (Berlin: De Gruyter, 1978), pp. 170-187.

<sup>51</sup> ギリシャ語版では、話し手の詠嘆を表すため韻文のようにになっている箇所があるが、スラヴ語版の訳者がこれを韻文のつもりで訳したと判断する根拠はないため、ここでは対話形式がキーであるとしておく。

<sup>52</sup> たとえばヨブの妻の髪のエピソード、ヨブとビルダドの間答の部分など。

<sup>53</sup> 土岐の訳では「ふたりの拳闘士が戦ってひとりが他方を打ち倒した」：土岐健治「ヨブの遺訓」, 397 頁。

<sup>54</sup> ヴィキオは古代世界に形成されたヨブのイメージとして Job the Patient (辛抱強きヨブ), Saintly Job (高德なるヨブ), Job the Angry (怒れるヨブ), そして Job the Wrestler (レスラーのヨブ) を挙げており、このうち最後のものの起源として TJob を指摘している: Stephen J. Vicchio, *The Image of*

единь другому вдли (Š 144) 「相手に打ち勝とうという古い弟子の中の弟子」<sup>55</sup> という珍妙な表現になっている。ブロックはこれを、ギリシャ語の ἀθλητής を μαθητής 「弟子」、παλαίωv 「格闘する」を παλαιῶv 「古い」と読んでしまったためと説明している。このような誤訳がスラヴ語訳者の力量不足によって生じたのか、底本のギリシャ語テキストに破損があったのかは不明としても、こうした意味不明箇所が存在が、後々の写字生たちにテキストの随意的解釈や書き換えを行わせる誘引となった可能性は否定できない。そしてそのような書き換えのさいに、写字生自身の言語、その時代の世俗語要素が侵入することは十分にあり得たかと想像される。

TJob が当初正典に近い、聖人伝のようなものとして受容されたとしても、のちの伝播の環境の中でおそらくこのテキストはより低位のもの—N. トルストイが論文「中世セルビア語の古スラヴ文語への関係 (ジャンル形成について)」<sup>56</sup> で示したハイアーキーでは中程にあるアポクリファか、それよりさらに下位のより世俗的テキストに近いテキストへと、その価値を変えたのかも知れない。

上記の理由付けには、推測も含まれているが、TJob のやや混沌とした言語状況はおそらく、テキストそのものに由来する要因や外的要因など、さまざまな因子が複合した結果形成されたのであろう。本稿ではスラヴ版 TJob を、その3写本の言語特徴という視点に限定して考察した。しかしこの興味深い、しかしスラヴ世界において伝統を築くことのなかったテキストについてはさらにさまざまな、より広い中世スラヴ文化の角度からの研究が必要であることはいうまでもない。

---

*the Biblical Job: A History*, Vol.1. Job in the Ancient World (Oregon: Wipf & Stock, 2006), pp. 107-109.

<sup>55</sup> М: есмь оученикъ единь другому вдолѣ (107v)

<sup>56</sup> Толстой Н. Отношение древнесербского языка к древнеславянскому языку (в связи с развитием жанров в древнесербской литературе) // Избранные труды. II. С. 200-211.

The Slavonic Version of *the Testament of Job*:  
Language variability in the manuscripts

MITANI Keiko

*The Testament of Job*, an Old Testament pseudepigrapha, is known to this day by Coptic, Greek, and Slavonic evidences. Cultural and religious circumstances in which *the Testament* emerged still remain unsolved because of the scantiness of evidence, although most scholars recognize the influence of *the Book of Job* in LXX on *the Testament*. The Slavonic witnesses, which are exclusively of Serbian provenance, have been regarded as of less importance from the viewpoint of the text-critical study aimed at the archetype reconstruction of *the Testament* because of various degrees and kinds of translation errors and editorial changes found in them. However, for the study of Slavonic philology and linguistics, the changes and discrepancies in the manuscript language are significant in analyzing the extent to which the literary tradition is infiltrated by vernacular elements and identifying the conditions under which such language variability emerges. This paper examines three Slavonic copies of *the Testament* from the fifteenth to the sixteenth century and argues that the Slavonic protograph appeared during the eleventh or twelfth century in the old Bulgarian literary tradition. The penetration of innovative features arguably began after the transmission of the Testament to Serbs but before the separation of textual tradition into two groups. It is assumed that the manifestation of language variability in the old Slavonic literary tradition has several relevant factors: the style of *the Testament* in which dialogues make up a considerable part, the belonging of this text to the parabiblical, apocryphal genre that is often infiltrated by folkloric components, and the translation errors included in the protograph which might have triggered the later editorial changes.